声なき虐殺

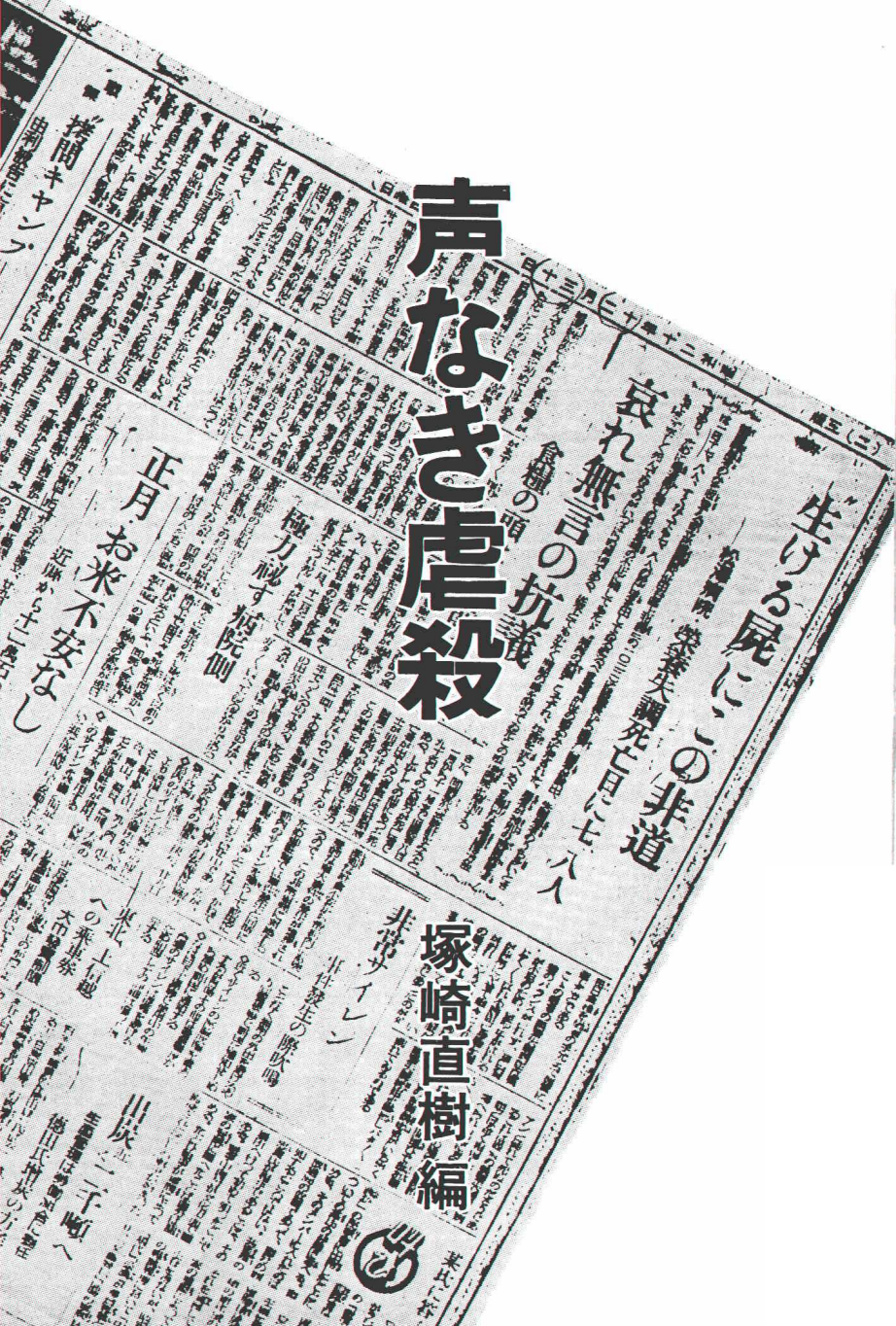
戦争は精神「障害者」に何をしたのか

塚崎直樹編

抗うすべもなく餓死した人びと…
戦慄の記録をいまここに問う

声なき虐殺

塚崎直樹編


生ける屍にこの非道
哀れ無言の抗議
栄養失調死亡日に七、八人
食糧の頃
極刀祕す病院側
正月お米不安なし
近頃から土
非常サイレン
非常時生の際叫喚
兵庫への兵士輸送
川崎二子島へ
徳田氏出馬の力
開墾キャンプ

塚崎直樹
1949年1月8日生まれ。1973年、金沢大学医学部卒業。京大病院にて研修。
1980年より京都博愛会病院精神科勤務。
現住所　〒606 京都市左京区一乗寺築田町56—1

声なき虐殺——戦争は精神障害者に何をしたのか
©1983　1036-831201-6987

1983年12月18日　初版発行　　定価　1500円

編　者　塚崎直樹

発行者　斎藤千代

発行所　BOC出版部
東京都新宿区新宿1—9—6　電話（03）354—3941　振替 東京 3—39331 〒160
印刷・新生舎印刷　製本・山崎製本所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

はじめに

戦争の体験が世代から世代に、どのように伝えられるかを、一般化することはむつかしいだろう。第二次大戦で日本人のそれぞれが体験したことは、大きな広がりと深さをもっている。その多彩さを容易にまとめることはできないだろうし、次の世代に手わたすことは、さらにむずかしいだろう。それぞれの人間が試みていくしかないと思う。

私の父は第二次大戦の敗北を南海のトラック島でむかえた。私は小学生のころから、父に戦争の体験をいろいろと聞かされてきた。その話の中で印象に残っているのは、人間の無意味に近い死ということだった。ここでは、二つのエピソードを書いておこう。

日本からトラック島へ向かう兵員輸送船は、アメリカの潜水艦にしばしばねらわれ、気がつくと、船体の下を魚雷が走っていることが、ときどきあったという。敵の潜水艦が発見されると、輸送船からは爆雷が投じられた。爆雷の爆発は激しい衝撃を与えるので、船体が爆発とともにビリビリとふるえた。それはまるで、魚雷の直撃をうけたかのようだったという。初めて爆雷を使用したとき、船に乗っていた兵隊の中に、爆雷の爆発と同時に海にとびこんだ者がいた。船に魚雷が命中したととっさに判断したのだろう。船は魚雷を回避してジグザグに航行しているから、とびこんだ兵隊を

助けるどころではない。白い航跡の間に、浮かんだり沈んだりして、やがて兵隊は視界から消えていった。彼が死んだことは明らかだが、彼の死にはどのような意味があったと言えるだろうか。

トラック島に着いてからは、イモ作りと防空壕掘りが毎日の仕事だった。米軍の空襲が激しくなってからは、補給も満足に行なわれなくなった。お茶を飲みたいと思っても、お茶がない。そこで、島にはえているお茶によく似た木の葉をせんじて飲むようになった。食糧不足がもっと激しくなったときのことを考えて、そのでがらしは乾燥させて、保存することにした。お茶のでがらしでも多少は、腹のたしになるだろうということだ。ところが父の部隊は、何度もの空襲で、その保存庫をこなみじんにこわされてしまった。しかし、部隊の中には破壊をまぬがれ、やがて食糧不足がひどくなったとき、それを食用にした部隊もあった。その結果、食べた兵隊の中から死者が発生し、お茶に似た木の葉には毒があることがわかったのである。爆撃のため毒の葉を食べずに生き残った人間と、食べたため死んだ人間、その違いの間に存在するものをなんと呼べばよいのだろうか。

われわれの社会にしろ、日々の生活にしろ、無意味に見えることや、無駄に思えることを伴っている。人間の中にはあわて者もいれば、のろまな者もいる。生活の中にはお茶を飲むという時間もあるし、それを保障する品々もあるだろう。社会全体を戦争の勝利に向けて、戦闘力の強化や維持に方向づけようとすれば、無意味に見えることや無駄に思えることは、次々とそぎ落とされていくだろう。そのとき、無意味さや無駄にむすびついていて保たれている生命があるとすれば、当然そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の生命は失われていく。

一九七八年、有事立法の必要性がさけばれたとき、私は戦争に向けた直接的な動きが目に見える形になってあらわれてきたことを感じて、危機感をもった。そして、たんに戦争に反対するという声をあげるだけでなく、戦争を可能にするような社会がつくられたとき、すでに抹殺されている存在があることを、明らかにしなければならないと考えた。私がこの記録集を作ることを考えたのは、そこに光をあてたいと思ったからだ。

戦争というと、われわれは、戦闘行為やそれをめぐる政治に目をうばわれやすい。戦争を可能にするような社会の中で、弱い存在、差別された人びとが、どのように生きてきたかに、目を向けることは少ない。その見落とされやすい立場に視座をすえて社会をふりかえったとき、そこから見えるのはたんに戦争に反対するということだけではなく、より奥ゆきをもった社会の姿であるだろうと思う。その光景は、海にとびこんだ兵隊の見た空の色や、毒の葉を食べた兵隊の感じた味覚に通ずるものがあるだろう。私はそのことに、自分の手わたされた戦争体験の意味をこめておきたいと思う。

目

次

はじめに　1

証言1　カルテから見えたこと

埋もれたカルテ　塚崎直樹　13

証言2　家族の声

手紙（その1）　河野洋一　29
手紙（その2）　河野敏江　31
マラリヤ注射　遠山雅子　36
戦時下を生き抜きながら　中島のぶ　49

証言3　看護士が見たもの

犬も食い、ネコも食いつくして　北島治雄　67
寒さ、回虫、ウジ　村田光次郎　77

食い物のウラミは恐ろしい　沢田重一　83
犬はうまかったが、ネコはネ　丹野代吉　87

証言4　看護婦の目

猛火に包まれて　浦野シマ　103
この世の餓鬼道　佐藤啓子　117
苦難の中に温かな交流が　中田洋子　124

証言5　医師は何をしていたのか

敗戦前後の精神病院　桜井図南男　133
地獄の沙汰も金次第　久保喜蔵　143
先生「処分」してください　吉川三郎　151
原爆で焼死した十人　天野友直　161
カラになった神経症専門病院　宇佐晋一　166

証言6　患者自身の声
軍隊で神経をやられて　黒川良雄　175
毎日三、四人ずつ「いった」　神谷健一　179
生き残ったのは十人に一人　山田正子　183

証言7　戦時下の中宮病院
いま思い出すこと、話せること　伏見俊三ほか　195

証言8　戦時下の精神病院入院患者死亡率
戦争中の松沢病院入院患者死亡率　立津政順　221

解　説　248
参考文献　263
あとがき　266

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

声なき虐殺

戦争は精神障害者に何をしたのか

証言1

カルテから見えたこと

埋もれたカルテ

塚崎直樹

私が戦争中の精神病院の記録を残さなければならないと考え出したころは、私はまだ京都大学付属病院の精神科に在籍していた。京大病院の精神科の図書室は研究棟とは別棟になっていて、コンクリートの古ぼけた建物である。その図書室の本棚の一部が、三十年以上昔のカルテの保存庫になっており、戦前・戦中の古いカルテはそこに並べてあった。私はときどき図書室に雑誌を調べに行った際に、そのカルテの棚に目を向けていたが、なかなかそれを手に取って調べる気にはならなかった。理由は、あまりにもその量が多すぎたせいである。戦争中・戦争直後の京大病院の退院患者数は年間二百人ほどであったので、カルテすべてということになると、その量はかなりのものになる。三十年以上も、人の手に触れられることもなかったであろうカルテは、ほこりをかぶっていた。ほこりはコンクリートの図書室の中では、クモの巣とわずかばかりの砂からなっていて、手にふれるとザラリとして、息を吹きかけてもなかなか飛んでいかない。カルテの記載は詳細にわたって

おり、カルテの大きさが週刊誌の倍以上はあるため、一枚一枚のカルテ用紙の厚さも加わって、これが実に重い。敗戦前後のころは、紙の質が低下し、インクも薄く、粗末な感じがするけれども、それでもやはり重い。大きいうえに重く、量的にも多いということになると、どうしても躊躇してしまう。カルテは何人か分をまとめて製本してあるが、その厚さは薄いものでも三センチ、書棚から取り出して、手にとってカルテを広げて読むなどということは、重くてとてもできることではない。図書室の一隅にある机まで持ってきて、その上で広げるしかない。ところがその机は、いつもだいたい未整理の図書が積みあげてあるため、自由にカルテを広げるゆとりなどほとんどないことが多い。そのために、見つかれば図書係の女性事務員に怒られるのではないかと思いながら、本の山をそろそろと動かして、やおらカルテを広げることになる。そこまでやるだけでも、「うんとこしょ」とかけ声をかけなければならない作業で、千人以上のカルテに目を通すとなると、それは実に肉体労働であるとの印象を、強くもたらす。日常的な診療活動のかたわら、そのカルテの山に取り組むということは、実に過酷な労働に思われて、私はなかなかその作業にとりかかることができなかった。何度か自分なりに、今度こそ着手するぞ、とかけ声をかけてみたけれど、いつもかけ声倒れに終わってしまっていた。

ところで病院には、だいたいカルテのほかに、入院患者台帳とか退院患者台帳とかというものがあって、患者の大まかな把握はそれでも可能であることが多い。京大精神科の場合にも退院患者台帳があるので、それを調べれば退院患者数や死亡者数は把握できることになっている。私がその台

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com